

労農連帯を一層強め、三里塚・ジェット闘争を貫徹しよう！



破産した「全国オルグ」の実態！

ますます強まる動労千葉の団結、
内部キレツ深まる動労「本部」！

われわれは、4・28・5・1の動労「本部」の名をもつてする暴力集団も含めた組織破壊「オルグ」を敢然とはね返し勝利したことを声高らかに宣言します。所詮、数をたのみに暴力と金力を背景に動労千葉破壊のみを目的にした、およそ労働組合の常識を逸脱した「脅迫」と「職場破壊」行為などでまじめな組合員の心をつかめるはずがありません。そもそもこのような「オルグ」の発想自体、労働者蔑視に引きまわしの思想からしか出て来ないものです。

まるで暴力団の「なぐり込み」!!!

四月十日以降、四月十七日津田沼電車区襲撃事件を頂点とする暴力のエスカレート、すなわち、青竹・パール・かけや・ペンチで「武装」した革マル学生を先頭に、ナツザックにつめて持ってきた石をいきなり投石しながら乱入し、居あわせた組合役員に青竹・石をもって集団リンチを加え「片岡津田沼支部長は頭蓋骨折の重傷を負わせられた」という「暴力団のなぐり込み」さながらのやり口を、わが眼で見た組合員にいくら猫なで声で話しかけたとしても「オルグ」になるはずはないのです。まさに、組合費のムダ使い以外の何ものでもありません。逆に千葉の組合員を「これが労働組合のやる事か!!」と激怒させ、増々団結と確信を深めました。

四日間に亘る連日二、〇〇〇人近くも投入した理不尽な「全国オルグ」に動労千葉一、四〇〇が意気軒コウと対峙し勝ち抜いた原動力は、自らの闘いが労働運動の大義を守る闘いであるという確信です。これは労働運動の原点に踏まえた団結がある限り、動労の真の改革は必ずや実現できるということの何よりの証です。

四日間「オルグ」が示した 動労「本部」の反動性

この四日間「オルグ」団は、暴力集団の本性をなんとかかくそうと必死でした。しかし、その本性は至る所に現れています。現に、新小岩、津田沼等に登場した「本部」宣伝カーの中には常にこれらの「武器」が隠されていたのです。しかも、全国青年部を僭称する革マル分子は、特別部隊を編成し、良心的組合員の眼の届かない所では好き勝手なことをやっていたのです。例えば千葉駅各ホームを「占拠」し、ホーム詰所を徘徊し、石田(中執)、佐々木(青年部書記長)にいたっては勤務中の乗務員を集団でどう喝しバッチ・ワッペンをひきはがしこづきまわすとい

う暴力行為を乗客大衆の面前で白鳳堂々で行っていたのです。当然にも石田や佐々木のこの蛮行は銚子や成田支部等の組合員から怒りをこめて糾弾されました。

反動暴力分子のひきまわしを許すな！

林委員長をたてれば何とかなると甘い考えで各支部にやってきた「オルグ」団も、「支部と地本は一体だ。俺達の委員長は関川委員長だ。地本はダメだが支部と組合員は動労だというならば、組合事務所を荒らし、鉄輪旗、ヘルメット、私物まで盗み去るとは何事だ。説明せよ」との組合員の問いに林委員長はしばし茫然として答えられず立ちすくみ、「そんなことはないはずだ」と自信なげに言うのみでした。そればかりではありません。「オルグ団」の代表者ですら「動力車新聞」号外のデマ記事を追及されて答えられず、「この号外は初めて見た」「事実と違う」等と言い出すしまつです。

「春闘」「地方統一選挙」「メーデー」を完全放棄し組合費を湯水のごとく使い動労千葉破壊にのみうつつをぬかす動労「本部」暴力集団を許してはなりません。

実際に「オルグ」に入った部隊は「全く成果がなかった」(立石門司地本副委員長の総括発言)と卒直に感じているのですが、四日間「オルグ」の総括で城石組織部長は「千葉に入れたことが成果だ」とごまかしの「総括」をし、「千葉一、四〇〇名は最初から切ることが前提だ。4・17津田沼襲撃は報復だ」と絶叫しています。

こうした反動的言辞を組織の責任者が公式の発言で臆面もなく言い、まかり通る組織は労働組合ではありません。

一部暴力集団のこのひきまわしと私物化の実態をはつきりと見すえ、今こそ全国至る所で動労大改革のための闘いに総決起していこうではありませんか。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ！